

# 女性の発想は農業を変える？

コピーライター 森 由香

もり ゆか さん



札幌市の広告制作会社勤務を経て、現在は「企画制作室mc m」で広報・広告に関する企画&原稿制作に従事。「北海道」と「農業」の情報発信にかかわるべく、道内各地の取材に走り回っている。季刊誌「カイ」編集・ライター、月刊誌「農家の友」編集委員。北海道フードマイスター、農都共生研究会メンバー。

◆「農と食に関わる」  
ことはビジネスに  
つながるか

ました。

どんな話をしたか、いかに緊張したか、  
というのは割愛させていただきます。参加  
者の皆さんは約三〇名、その中には、

「食と食に関わる仕事になりたい」「生産  
者と消費者の橋渡しになりたい」と、い  
まの仕事の拡大や、新たな起業を考えて  
いる方も多くいました。年齢も二〇代か  
ら五〇代と幅広く、男女もほぼ半々、皆  
さんとても熱心に耳を傾けてくれました。

このセミナーに農業者の参加はなく、  
それでも「6次化」に強い関心を持って  
いる一般の人がこんなにいるのだと思い  
ました。ほかの6次化セミナーにも多く  
の人が参加しているらしいので、「食と  
農」に関わる人がどんどん増えれば、北  
海道農業にとっても心強いものになるは  
ずです。ただし、農業への関心や応援を  
ビジネスにつなげることはかなりの難関  
です。

人間いくつになっても  
「初」はあるものですね。  
二〇一三年十一月、初め  
てセミナーの講師とい  
うのを体験しました。私も  
メンバーとして所属する  
農都共生研究会からの依  
頼で、「6次産業人材育  
成講座」の九〇分コース。  
話を聞いたときは「いや  
いやいや、とんでもない  
」を何万回も繰り返した  
のですが、テーマが  
「パッケージデザインと  
ネーミング」という自分  
としてはやりやすいテー  
マだったこと、最初で最  
後の経験もいいものかと  
思い、引き受けてしま

6次化プランナーとして仕事ができる  
人はそう多くはありません。農産物を扱  
う直売や宅配を始めた人もいますが、北

海道の場合はどうしても「冬」がネックになります。なんだかねガティブな話になってしまいますが、私自身も「自分ができているのか、どう農業と関わっているのか」と常に模索しています。そんな五里霧中に陥りそうな時、ぱーつと霧が晴れるような「発想」に出会いました。

#### ◆女性起業家の発想が 農業を変えるかも

井口芙美子（いのくち・ふみこ）さんに初めて会ったのは三年前、「おむかえまるしえ」の発案者として紹介された時です。

「おむかえまるしえ」とは、保育園で開かれるマルシェのこと。保育園に子どもを預けているお母さんは仕事をもち、日々の買い物にも苦労しています。そこで、井口さんは知り合いの農家に声をかけ、お母さんたちがお迎えに来る夕方に、保育園のすぐ隣で農産物を販売してもらうことにしたのです。



「いただきますカンパニー」の代表、井口芙美子さん

そこに並ぶのは畑からのとれたて野菜ばかりなので、子どもたちにも安心です。井口さん自身も小さな子どもを抱えて仕事をしていたことからのアイデア。「この人の発想力はすごい！」と感服したのを覚えています。

そんな井口さんが起業したと聞き、帯広へと向かいました。待ち合わせ場所は、なんと「ながいも畑」です。

井口さんが企画したのは、「とかちの畑でおさんぼランチ」というツアー。広大なながいも畑の中を、井口さんが「畑ガイド」となって案内してくれます。ながいものことや十勝農業のこと、どんな質問にも答えてくれる、すばらしいガイドぶり。そして、お昼になると畑のすぐ横にテーブルがセッティングされ、十勝小麦パンのサンドイッチ、フライドポテ



ながいも畑を見たことがない人も多く、畑ツアーは好評



特別にトラクターの運転席に座らせてもらいました



畑を眺めながら食べられるようにランチを準備

ト、黒豆茶、ながいも団子のお汁粉と、十勝ならではのメニューがずらり。そして、畑の持ち主である生産者も参加して、青空の下でランチ&交流タイムが楽しめます。

このような畑ツアーや畑カフェを企画し、実行に移すために、井口さんは「いただきますカンパニー」という小さな会社を立ち上げたのです。

「目的は食卓と畑を結ぶこと。消費者の皆さんは、畑の中に足を踏み入れるだ

けでも感動します。でも実りの時期は、

農家の皆さんが一番忙しい時期。私たち畑ガイドが案内することで、農作業の手を止めることなく、生産現場を見てもらうことができます」と井口さん。彼女の発想は、参加する人がみんなハッピーになることを基本にしているようです。

井口さんは、ながいもの収穫にはかなりの技術を要することや、土の管理の難しさなども詳しく教えてくれます。生産者が作業をしていれば、どんな作業で、

何のためにしているかをガイドしてくれます。実際に畑を歩きながら話を聞くと、生産者の苦勞が実感として伝わってきます。そして、生産者にとってはふだん通りの仕事をするのが、ツアー参加者の満足につながるの、協力する農家も増えているそうです。

「これからは畑ガイドの養成が課題です」と井口さんが言うように、知識があり、信頼できる畑ガイドがこの企画のカギになります。でも、このような畑ガイドの需要が全道的に広がれば、「食と農に関わる仕事がしたい」という人の雇用につながります。

畑ツアーと畑ガイドの発想は、地域に貢献しながら、農業観光の新たなビジネススタイルになる。そんな気がしてなりません。

#### ◆ハングリーな農業女子も

立ち上がった!

最後にもう一つ、立ち上がった女性たちの話を。二〇一三年一二月、若手女性

農業者ネットワーク「はらべ娘」が設立されました。「はらべ娘（こ）」とは、現状に満足しないハングリー精神を持った農業女子ネットワークの意味。なんともかっこいいではないですか！

年に一度、北海道農業公社の主催で、全道の女性農業後継者が集まる研修会があり、そこで知り合った農業女子たちが新たなネットワークを立ち上げたのです。

なぜ、ネットワークが必要なのか？農業女子にはたくさんの悩みがあるからです。跡継ぎにならうと自分で決めたのに後継者として扱われない。技術や経営のことをもつと学びたいのに、会議や勉強会は男性ばかり。女性というだけで活動の幅が狭く、得られる情報も少なく、孤立してしまうというのです。

実際に彼女たちに会ってみるとわかります。農業を自分の仕事として誇りに思っていること。農業の魅力を伝える柔軟なアイデアを持っていること。

女性たちの発想力は、既存概念に風穴を開けることがよくあります。男性中心

の農業社会には、穴を開ける余地がまだまだあるような気がします。はらべ娘の設立メンバーは二五人ですが、道内にはやる気のある女性後継者はいっぱいいます。その力を結集して生かしていけば、北海道農業はもっとすごいことになるはず。二〇一四年がとも楽しみななってきました。



若手女性農業者ネットワーク「はらべ娘」のメンバー